

【様式2】

番号	項目	具体的な目標（達成水準）
2	<p>4項目において上回っていたが、平成25年度は、全国平均を全ての項目で下回っている。 0/8項目</p> <p>小学校では「記述する力」、中学校では、「基礎的な学習内容」が身に付いていないことが考えられる。</p>	<p>・達成できなかった原因を踏まえ、県学力調査を実施し、全国学力・学習状況調査と連動させながら、確かな結果分析に基づく体系的・総合的な学力向上対策を推進していく。</p>
	○職業教育の推進	○新規公立高等学校卒業者の県内就職率（県内就職希望者に対する県内就職者の割合）が、総合計画における最終目標値（93%）を上回る
	達成状況の区分：達成した	<今後の課題>
	<p><達成状況></p> <p>・新規公立高等学校卒業者の平成26年3月末現在の県内就職率 98.0%</p>	<p>・引き続き、キャリアサポートスタッフによる県内企業の開拓や情報収集をおこない、県内すべての学校に県内企業の魅力や情報を発信していく。また、新たな取組として、保護者対象の県内企業見学会を実施し、県内就職希望者の割合を増やす。</p>
	○国際化に対応した教育の推進	<p>○小学校低学年からの英語活動に向けて取組を行う市町の割合 70.0%</p> <p>○語学を活かした進学又は就職を希望する生徒の割合 （「長崎発」グローバル人材育成支援事業参加生徒における割合） 90.0%</p>
達成状況の区分：一部達成した	<今後の課題>	
<p><達成状況></p> <p>・小学校低学年からの英語活動に向けて取組を行う市町の割合 76.2%</p> <p>国の方針等を踏まえ、各市町では教育課程特例校の検討や、学校における低・中学年からの英語活</p>	<p>・文部科学省の方針等を踏まえ、市町教育委員会への啓発を行う。</p> <p>・語学を生かした進路選択に対する生徒の意識向上を図るため、語学力を高めグローバルな視野を育てる活動を更に充実させる。</p>	

【様式2】

番号	項目	具体的な目標（達成水準）
2	<p>動を推進するなどしたりしている。</p> <p>・語学を活かした進学又は就職を希望する生徒の割合（「長崎発」グローバル人材育成支援事業参加生徒における割合） 89.7%</p> <p>目標値90%に対して、ほぼ達成しているものの、参加生徒の多くが高校1年生であったため、進路希望がまだ明確に定まっていな生徒もあり、目標が達成できなかった。</p>	
	○特別支援教育の推進	○県内公立幼・小・中・高等学校における「個別の教育支援計画」の作成率 70.0%
	達成状況の区分：達成した	<今後の課題>
	<p><達成状況></p> <p>・平成25年度特別支援教育体制整備状況調査（平成25年9月1日現在）</p> <p>・県内公立幼・小・中・高等学校における個別の教育支援計画作成状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体の作成率 71.2% 〔幼稚園の作成率 78.6%〕 〔小学校の作成率 88.0%〕 〔中学校の作成率 79.8%〕 〔高等学校の作成率 47.4%〕 	<p>・幼稚園等から小学校への円滑な就学や、小学校から中学校、中学校から高等学校への継続した指導・支援の充実を図るため、個別の教育支援計画を作成・活用した支援の充実及び学校間の引継ぎや連携を推進する。</p> <p>・個別の教育支援計画の作成の意義や具体的な作成方法等の研修を実施し、作成率の向上を図る。</p>
3	○ふるさと教育の推進	○郷土長崎県への理解と愛情のある児童生徒の割合 近所の人に挨拶をしている児童生徒の割合 95.0% 地域の行事に参加している児童生徒の割合 65.0%
	達成状況の区分：達成できなかった	<今後の課題>
	<p><達成状況></p> <p>・近所の人に挨拶をしている児童生徒の割合 93.8%</p>	<p>・挨拶については、「あいさつやマナーの向上」の取組を重点的に推進する。</p>

【様式2】

番号	項目	具体的な目標（達成水準）
3	<p>学校教育活動全般において取り組んでおり、前年度から9割を超える達成状況で、ほとんどの児童生徒が挨拶はできているが、目標は達成できなかった。</p> <p>・地域の行事に参加している児童生徒の割合 54.5%</p> <p>中学生は、小学生に比べ、土・日に部活動へ参加すること等から中学生の参加率が低いため、目標が達成できなかった。</p> <p>両目標については、目標値の達成には至っていないが、全国平均（挨拶89.5% 行事52.8%）を上回っていること、前年度（挨拶92.6%・行事54.1%）の割合よりも高くなっていることから成果は表れている。</p>	<p>・子どもの発達段階や生活実態に応じた行事内容や参加形態を工夫するとともに、各種行事の情報が確実に家庭に届くよう周知方法を工夫する</p>
	○子どもの読書活動の推進	<p>○公立小・中・高等学校の児童生徒の1か月の読書量</p> <p>【小】 12.0冊</p> <p>【中】 7.0冊</p> <p>【高】 4.0冊</p>
	<p>達成状況の区分：一部達成した</p> <p><達成状況></p> <p>・1か月の読書量</p> <p>小学生 12.9冊</p> <p>中学生 5.5冊</p> <p>高校生 4.0冊</p> <p>中学生においてはインターネットの使用などメディアに触れる時間の増加などの理由により目標値を達成することができなかったが、全国平均の4.1冊を上回る数値となっている。</p>	<p><今後の課題></p> <p>・小学生、高校生は目標を達成したが中学生は達成できなかった。平成26年1月に策定した第三次長崎県子ども読書活動推進計画に基づき、中学生の読書活動がより活性化するような働きかけを検討し、事業に取り組む。</p>

【様式2】

番号	項目	具体的な目標（達成水準）
3	○豊かな心と志をもってたくましく生きる力の育成	○夢やあこがれを実現するために努力している中学生の割合 60.0%
	達成状況の区分：達成した	＜今後の課題＞ ・ 今後は、「夢・憧れ・志」育成プロジェクトにより、産学官や学校・家庭・地域の連携を強化し、社会全体で子どもたちの「夢・憧れ・志」を育んでいく体制を構築していく。
	＜達成状況＞ ・ 夢やあこがれを実現するために努力している中学生の割合 70.4% 平成21年度から「夢・憧れ・志」を育む事業を実施し、各学校では全ての教育活動において「人との出会い」を重視した教育活動の取組が実践されている。	
○学校体育・スポーツの推進	○全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、児童生徒が「体育の授業で運動やスポーツが今までよりもできるようになった」と回答する割合 93.0%	
4	達成状況の区分：達成できなかった	＜今後の課題＞ ・ 体育担当者会、市町体育担当主事会、指導力向上セミナーなどの研修等の充実により、指導力の向上を図る。 ・ 子どもたちが意欲的に運動に取り組むよう、各学校における体力向上アクションプランの活用を促進する。
	＜達成状況＞ ・ 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における回答 89.7% 子どもの体力向上が盛り込まれた学習指導要領の改訂が行われたが、改訂の趣旨の浸透・定着が遅れており、その内容の理解度が低いためと考えられる。	
4	○安全・安心で快適な学校づくりの推進	○県立学校の非構造部材耐震化率 体育館・武道場の照明器具落下防止対策 100.0%
	達成状況の区分：達成した	＜今後の課題＞ ・ 体育館等の大規模空間に設置されている吊り天井落下防止対策を行う必要がある。
＜達成状況＞ ・ 体育館・武道場の照明器具落下防止対策 100.0%		

【様式2】

番号	項目	具体的な目標（達成水準）
5	○学校・家庭・地域の連携による子どもの育成	○「学校支援会議」等における自らの取組が、学校・家庭・地域の連携につながっていると評価している小・中学校区の割合 95.0%
	達成状況の区分：達成した ＜達成状況＞ ・「学校支援会議」等における自らの取組が、学校・家庭・地域の連携に役立っていると自己評価している小・中学校区の割合 98.2%	＜今後の課題＞ ・「大変役立っている」という評価は全体の4割弱、中学校は3割弱に止まっており、今後はこの割合を5割程度まで高めるため、取組内容の質的な高まりと、多くの地域住民参加を得られることが、課題である。
6	○生涯学習環境の整備	○ながさき県民大学の講座受講者数 525,000人
	達成状況の区分：達成した ＜達成状況＞ ながさき県民大学の講座受講者数 534,667人	＜今後の課題＞ ・県内の市町、大学における講座は全体的に減少傾向にある。現在の講座数・延べ受講者数を維持していくためには、毎年新規の講座登録を増加させていく必要がある。
7	○文化芸術活動の推進	○「2013 長崎しおかぜ総文祭」に参加した高校生及び一般観覧者等の総数 100,000人
	達成状況の区分：達成した ＜達成状況＞ 「2013 長崎しおかぜ総文祭」に参加した高校生及び一般観覧者等の総数 128,397人	＜今後の課題＞ ・しおかぜ総文祭の成果を継承した取組
	○競技力向上対策の推進	○国体の天皇杯順位（総合順位） 10位以内
	達成状況の区分：達成した ＜達成状況＞ ・平成25年東京国体では、25競技85種目において入賞を果たし、天皇杯得点1219.5点で10位となり、目標としていた「10位以内」を達成した。	＜今後の課題＞ ・平成26年「長崎がんばらんば国体」での天皇杯獲得に向けて、ジュニアから成年までの一貫した指導体制のもと、引き続き「全競技種目の強化」に取り組んでいく必要がある。